

# 尚綱語文 発刊にそえて

武田昌憲

ときどき散歩に出かける場所として、宮本武蔵の墓（塚）がある。本学、榆木キャンパスの近くを走る豊後街道沿いにある。細川藩主への感謝と参勤交代の無事を見守るために武蔵の遺言でこの地に葬られたという。今は公園として整備され市民の憩いの場となつて親しまれている。そのため、付近では武蔵を附した地名・駅名や学校が多い。本誌も武蔵のように、学生の指標として、また「絆」の一つとして機能することを希望してやまない。

本学学園、尚綱学園の開学は明治二十一年。濟々躰附属女学校としてはや百二十四年の長きにわたる。尚綱大学の開学は昭和五十年。この時に開設された文学部国文学科の伝統も、はや三十七年、その間、文化言語学部・文化言語学科・日本文化・日本文学コースあらため、日本文学・言語コースとして今日に至っている。三十数年という月日の間に多くの卒業生が社会に巣立ち、教育関係のみならず、全国で様々な分野で活躍していることは喜びにたえない。しかし、同じ国文学（日本文学）を学んだ者同士がもつと積極的に「絆」を求めてもよいのではなからうか。その方法をいくつか考えてみた。その一つがこの『尚綱語文』という、ささやかな小冊子である。

尚綱大学の日本文学を学ぶ学生及び卒業生・教職員  
の何かの拠り所「絆」になればと思う。

「絆」という言葉は、奇しくも一年前の平成二十三年三月十二日の東日本大震災を契機として、人々の助け合いや心の結びつきが強く意識されるようになってきたことからよくいわれるようになってきた。本学の文化言語学部、文化言語学科、日本文学・語学コースも教職員・学生卒業生との「絆」をこれまで以上に重視し始めている。日本人が忘れていた大切な心の一つである。本誌の「絆」がきっかけとなつて、より一層の人生の糧になればとも思う。そついつた意味では本誌の発行と大震災とは無縁ではないかもしれない。

ようやく本誌を見て「絆」の二つが見えてきたといえる。  
是を基に一層の発展をしていければと思う。

なお、表紙の題字「尚綱語文」は文化言語学部学部長の林田俊一郎先生に筆を取っていただいた。このまま続刊も表紙を飾らせていただきたいと思う。

平成二十四年三月